「比類なき罪の赦し」

エペソ人への手紙１：７

October.24.2021

エペソ人への手紙１：７（パワポ）

Preface

私たち一人一人には、一人一人の人生があります。

そして、その人生の中でやってきたこと、成してきたこと、体験したことは、人それぞれ色々たくさんあると思います。

そんな私たちの人生を一言で言うと、何と例えることが出来るでしょうか？

これまた人それぞれ違うかもしれません。

私が２０年前韓国の神学校に入学した直後から卒業するまで、神学校のすべての先生方から何度も何度もお話を伺ったのが、その神学校の初代学長の朴允善先生という方の話でした。

この先生は、２０００年という長いキリスト教の歴史の中で世界でも１０人といない創世記からヨハネの黙示録まですべて一人で注解書を書き上げた方で、８５年前、船に乗って１ヶ月掛けてアメリカに留学する際には、船の中でヨハネの黙示録を全部暗記してしまい、宗教改革者のジョン・カルヴァンが唯一注解書を書かなかったヨハネの黙示録から注解書を書き始めたとか、母国語の韓国語以外に英語、日本語、オランド語、ドイツ語、ギリシャ語、ヘブル語、ラテン語に堪能で、常に祈っていた祈りの人で、いつも熱く、その聖書研究の熱心さとイエス様への情熱は言うに及ばず、良く口癖にしていたのが「聖書研究や説教準備をしながら死ねたら、それこそ立派な殉教です。しかし、私を含め、聖書研究や説教準備のために死んだ神学生や牧師をまだ一度も見たことがありません」という言葉で、後にも先にも韓国の三大改革派系神学校すべての学長を務めたのはこの朴允善先生しかおらず、今いる韓国の改革派または福音主義神学校の教授の多くはみんなこの方のお弟子さん、または孫弟子だと言っても過言ではない程のものすごい神学者であり牧師だったとお聞きしました。

そんなにすごい方だったのかと、２００本ほどシリーズで発売されていた説教テープは全部買い、また幸いなことに私が２年間伝道師として働いた教会は、この朴允善先生が開拓した教会で、その教会内に朴允善先生の本だけを出版する出版社があって、ただで聖書注解書全巻を頂いたりもしました。

すみません、何でこんな話を突然したかと言いますと、この朴允善先生が召される前に残された言葉をお話ししたかったからです。

朴允善先生は、１９８８年８３歳で召されたのですが、私が神学校に入った時の学長を含めたくさんのお弟子さん教授たちが、最後召される前の病床にお見舞いに行ったそうです。
そこで、「先生、先生の人生はどんな人生でしたか？」と質問を投げかけたところ、そこにおられた皆が尊敬する立派な先生なので、「何かすごいことを仰って下さるんじゃないか」と思い耳をそば立てていましたら、こんなことを仰ったそうです。
「私は８３年間、神の前に罪しか犯して来なかった罪人でしかありません。」

その言葉に、その場にいた誰もが予想を遥かに覆す言葉だったため、唖然とし、呆気にとられて何も言えなかったそうです。

そして、その次に湧き上がってきた思いが「この朴先生が、こんなふうにおっしゃるほどならば、私たちはいかほどに罪人なんだろうか・・・」という思いだったそうです。

Part One

でも、この朴允善先生の「私は８３年間、神の前に罪しか犯して来なかった罪人でしかありません。」という言葉は、裏を返せば、「とてつもない恵みに与り、その恵みに満ちた人生でした」という魂の奥底からの実感が籠った告白にもなります。

では、どういう実感か？
先ほどお読みしたエペソ書１：７の御言葉が、「正に、その通りだ！」と、「これなくして、私には幸いもなければ、喜びもなければ、報いもなければ、祝福もない！」という実感です。

エペソ人への手紙１：７（パワポ）

つまり、「罪の赦しという比類なき神の恵みに与る幸いな罪人だった」という申し訳ないくらいに感謝満ち溢れる実感です。

「生きることすべてが罪だった」という人生観は、もしその人が、このエペソ書１：７の言葉の意味を知り、味わい、人生の節々で実感しているならば、不幸なことではありません。

むしろ、このエペソ書１：７の言葉が、「我が人生に及んでいる事実だ」という実感があるならば、「生きることすべてが罪だ」ということが幸いになります。

話すことも、見ることも、聞くことも、仕事することも、勉強することも、食べることも、寝ることも、農業することも、漁業することも、作ることも、科学

することも、息することさえも、すべてが罪だという罪意識をイエス・キリストゆえに持つことが出来ているなら、幸いなことです。

なぜならば、心底闇だという罪悪を意識できるというのは、キリストの血による贖いという罪の赦しを、神の恵みを受けているという実感の裏返しだからです。

人は、素のままでは、罪を認識できません。

ジョナサン・エドワーズという１７００年代アメリカプリンストン大学の三代目学長であり、その説教を聞いた人々があまりの神のご臨在ゆえに卒倒したり気絶するほどの牧師であり、神学者であり、哲学者であった方が、こんなことを言いました。
「人間の施すすべての善行は、その内にキリストの福音が無いならば、プライドや恐れが動機であり、根源である。」

つまり、それほどに、人の罪は根深く、人は自分が罪人であるということを認識するのが困難だということです。

なぜ、人は人を裁くのか？
なぜ、私たちは自分の心が傷ついたことばかりに捕らわれ、闇雲に人を傷つけるのか？
なぜ、自分の主張は正しくて、相手の話や言葉は間違っているように感じるのか？
なぜ、相手が意図している愛よりも、そのほころびや足りなさばかりが気になって、注意し、戒め、物申してしまうのか？

それは、「神の前に、我が人生それすべて罪です」という実感が欠落しているからです。

事実です。
私たち皆が、「神の前に、我が人生それすべて罪です」という実感が欠落しています。
私たち皆が皆、欠落しています。

こんなことを言いますと、必ずと言っていいほど、「いやいや、私はそこまでではない」と思う方が、私を含めます。
「あんな良いこともしてきたし、こんな良いこともしているし、悪気があってやったことではなく、良かれと思ってしていることだから、　間違っているとは思えないんだよね。」という思いが、怒りと共にふつふつと心の底から湧き上がってきます。

しかし、このことに関して聖書は、有無を言わさず、「『神の前に、人生それすべて罪です』という事実は変わりません」と淡々と言っています。

Part Two

創世記３：１７（パワポ）

私個人的に、「すべての答えは創世記１－３章の中にある」とここ最近特に感じていますが、「神の前にあって、人生それすべて罪だ」という事実をこうも淡々とシンプルだけれども、有無を言わせない鋭さをもって真っすぐに語っている言葉はないかもしれません。

「大地は、あなたのゆえにのろわれる」
「すべての命を育む土台である大地が、人の罪ゆえにのろわれた」と言います。

確かに私たちは、人の営み、人間活動ゆえに誰もが認めざるを得ない大地がのろわれたという事実を目の当たりにする時代に、今生きています。
「人が呼吸することさえも罪だ」と言われても仕方がないような、大地が人ゆえにのろわれてしまった状況を見て、聞いて、感じて、そして、その中で日々罪を犯し続けながら生きています。

今この瞬間も、人を裁く気持ちと、我こそ正しいという思いが、ふつふつと湧き上がってきます。

この人の罪ゆえに呪われると宣言された大地に、それでも根を張り、命を繋ぐために生きようとした最初の人間アダムとエバ夫婦に起こった事件が、命を繋ぐという思いとは真逆の長男が次男を殺してしまうという惨たらしい悲劇でした。

そして、この悲劇のことを聖書が何と記しているかと言いますと、

創世記４：１０－１２（パワポ）

「殺された弟の血を受け止めた大地が、人が人を殺めるという呪いゆえに悲しんでいると、憤っていると、怒っている」と言います。

そして、そのすべての命を育む土台である大地に嫌われた人間に対して、神様が１１節で「今や、あなたはのろわれている」とはっきりと公言なさいました。

言葉を換えますと、「あなたが生きるそのすべてが、罪である」ということです。

私たちには申し開きする術もなければ、言葉もなければ、根拠もありません。

なのに、自分なりに無理矢理術を作り、言葉を操り、根拠を捏造して、「いやいや、私はそこまでではない」と主張し、思い、人を裁き、傷つけ、ほころびや足りなさばかりに目が行き、人の意図した愛に気付かず、気付いていても無視します。

唯一神のかたちに造られた尊いはずの人間同士が傷つけ合い、結果的に、大地を傷つけ、神を冒涜し、神を殺め、神を無き者とします。

Part Three

ここで一つ皆さんに、質問をしたいと思います。
私たちはなぜ、聖書を読んでも、読めてこないのでしょうか？
私たちはなぜ、聖書が言わんとしていることが、入ってこないのでしょうか？

根本的に、聖書の言葉が入ってこないのは、神学的な知識や信仰経験が足りないからではありません。

聖書に登場してくる人物や事件や出来事を見て、「いやいや、私はそこまでではない」というひねくれた、ねじ曲がった正義感と自己正当化が、私たちの中にあるからです。

そのひねくれた、ねじ曲がった正義感と自己正当化の思いゆえに、人が人を殺してしまう箇所とか、戦争する箇所とか、自分よりも弱い立場の人を蔑む箇所とか、私たち人間のお金や富に対する貪欲を記している箇所とか、人が人をだます箇所とか、親が愛しているはずの我が子を自分のひもじさを満たすために煮て食ってしまう箇所とか、夫が妻を利用し、妻が夫を欺き、弟が兄を蔑み、兄が弟を売り飛ばし、親類親族家族同士争い、近親相姦し、姦淫する男性や女性が登場し、娼婦や遊女、またそれを買う男性が登場してくるという人間の持つドロドロとしたところが、「いやいや、私はそこまでではない」というねじ曲がった倫理道徳感、正義感、自己正当化、それまで培われ、養ってきた歪曲した常識や風習や価値観や世界観に縛られて、聖書の御言葉が全くもって、読めてきません。

ある本を書評する言葉で、「不健全の中にある真実が描かれている」というような言葉を目にしたことがありますが、正に、聖書こそ、不健全の中にある真実だらけです。

私たちが作り出している社会は、特に日本社会はその典型だと思いますが、人間の不健全さを覆い隠すために、見てくればかりを整えて、例えば法だったり、組織だったり、教育だったり、食べ物だったり、衛生面だったり、ありとあらゆる形ある有形の物だったり、所謂不良と言われるものを排除し、子供たちの目の

届かないところに追いやったりしながら、見てくればかりを整えて、その中に身を置くことをもって、「不健全な中には生きていない」という意識を植え付け、また植え付けられながら生活しています。

そんな感じなので、「不健全の中にある真実だらけ」の聖書の記述が、自分のことを健全だと思っているがために入って来ませんし、分かりません。

「私も、私が生きている社会も、そこまでではない」という自己正当化が先立って、聖書の中にある不健全さに描かれている真実が見えて来ることもなければ、入っても来ませんし、自らが闇そのものであるという事実を認めることが出来ません。

だから、海が割れるとか、神の声が肉声として轟くとか、天に繋がるはしごが現れたとかいう衝撃的な方法を用いて、神ご自身を人にあらわす場面が聖書のそこかしこに登場してきます。

タイヤモンドよりも固い私たちの頑なさ、頑固さ、罪深さをかち割り、気付かせるために、相当な衝撃をもって神様は、神様ご自身をあらわすことがあります。

エペソ書の著者であるパウロ自身も、天からイエス様の声を聞き、まばゆいばかりの光ゆえに目が見えなくなってしまうというかなりの衝撃をもって、そのダイヤモンドよりも固い自我という殻をかち割られました。

聖書の中の、友のために命を懸けたとか、神様が身を粉にして私を守ってくださったとか、イエス様が私のために犠牲になって下さったとかいう、いくらでもメルヘンチックにも捉えることの出来る箇所は、すんなり入ってきます。

でも、私たちの持つ、ずるさ、汚さ、残忍さ、本性を隠すぶりっ子さなどは、入って来ません。
さらに上行く狡猾さは、「いやいや、僕は、私は、十分に自分のことを罪人だと思っているし、自分にあるずるさや汚さや残忍さや本性を隠すぶりっ子ぶりはよく分かっているよ」と言いながら、ずるくて、汚くて、残忍で、本性を隠すぶりっ子な人がいます。

私自身、正に、この部類に入ると思います。
こんなことを壇上で告白しながら、また、いい子ぶる、ずる賢さがあります。
なくなりません。

だから、なおさら「我が人生、すべて罪です」と告白するしかありません。

私たち人間は、どこまで行っても、自分のことを正当化したくなる罪人です。

つい最近、新聞の特集記事で、長崎県有明海の干拓事業（堤防や水門で仕切って、海の水を排除して陸地にすること）による生態環境の激変について知りました。
漁業関係者は、乱獲ゆえの海洋生物の減少はさておき、漁業環境が悪化してるから海に繋がる水門を開けることを願っているし、陸地で農業を営んでいる方たちは、水門を開いて海水が入ってくると塩害で作物が作れなくなると主張し、どっちの話も、漁業ありき、農業ありきでの話がぶつかり、
また遠くケニアでは、アボカドを作るための農園を絶滅危惧にある象の通り道に作って、生活のためだし、象の通り道ではないから大丈夫という意見と、象を守るためにダメだという意見とぶつかっていたりと、互いが互いに正当化し合います。
だからと言って、彼らを責められないのは、私たち見てくればかりを綺麗に整えることに専心し、結果的に搾取しながら私たちの肉体の命を保つためにそれらを食さずには生きられないという社会の先頭を走っている者として、結果的に大地を呪いに追いやっている罪人なんだということを思わずにはいられません。

隣り近所や、すぐ横隣の人だけでなく、日本全国、世界レベルで、グローバルに自己正当化が繰り広げられていますし、正当化の罪を犯さずには生きられないのが私たち人間、罪人です。

私たち人間は、どこまで行っても、自分のことを正当化したくなる、せずにはいられない罪人です。

小さな不快な気持ちの正当化から、莫大な利益を生み出しているからいいでしょと言わんばかりのグローバルな正当化に至るまで、多種多様な罪にまみれて私たち生きています。

エペソ書の著者である使徒パウロも、他者を裁くことをもって、自分を正当化する者として生きていました。
それも、神の名によって自分を正当化し、どこまで正当化していたかと言いますと、イエス・キリストを信じる者たちをとっ捕まえて殺すことを、神の名によって、聖書の御言葉の正しい実践という名目を真剣に振りかざして正当化していました。

そんな彼だからこそ、出て来た言葉がエペソ書１：７の言葉です。

エペソ人への手紙１：７（パワポ）

Part Five

罪の赦しは、神の恵みでしかありません。

私たち人間にどうこう出来る問題ではなく、また、赦される資格があるわけでもなく、赦される理由や権利があるわけでもありません。

ただただそこにあるのは、理由なき神の恵みだけです。
そこにあるのは、神の慈しみと哀れみと愛だけです。

そして、人の罪の赦しは、キリストにあってのみしかなされません。
キリスト以外に、キリストの血の贖い以外にのろいを除く罪の赦しはありません。

このエペソ１：７に出てきます「贖い」という言葉は、奴隷を買い戻し解放する時に使う言葉です。
つまり、罪の奴隷である私たちを他の何物でもない神自らキリストとなって、ご自分の命を差し出し、支払われたということです。

聖書では、イエス・キリストが私たち罪人のために十字架に架かり、大地ののろいから、神の御怒りから解放する救いのわざを言い表すのに、奴隷を買い戻し解放するためのお金のやり取りに使う単語を用いて説明します。

この神の支払いは、私たちに神様が支払わなければならない借金があって、私たちのために支払ったわけではありません。

私たち自ら、私たち自身の借金を支払う能力もなければ、借金が膨大過ぎて支払う事なんか到底出来ず、出来ないからはなっから支払う気もなければ、支払うという概念さえも忘れ去っている私たちのために、神様は、神ご自身であり、ひとり子である主イエス・キリストの命というこれ以上ない最上の支払いをもって支払い、罪の奴隷より開放し、燃えるゲヘナに投げ込まれるという永遠の滅びから私たちを解放してくださいました。

そして、やがて人の罪ゆえの呪いが原因で滅びることが決まっているこの世界、この大地と共に滅びるのではなく、新しい天と新しい地、神の御国を受け継ぎ、そこで新たに永遠のいのちをもって育まれるという祝福に入れると約束までなさいました。

エペソ人への手紙１：８－１１（パワポ）

この神の恵みゆえに、キリストの血による贖い・罪の赦しゆえに、そして、神の御国を受け継ぐという約束に生きられるゆえに、「私は８３年間、神の前に罪し

か犯して来なかった罪人でしかありません」という告白を、人生の最後に口にすることが出来るわけです。

もっと言いますと、神様は、私たちをご自身の資産としてくださいました。

１１節の「御国を受け継ぐ者となりました」という言葉が、新改訳２０１７版聖書では、欄外に別訳として「神の資産となりました」とあります。
私たちが御国を受け継ぐとは、実質、私たち自身が神の資産、つまり、神が神であられるという神としての価値を、恐れ多くも私たちの罪を赦し、神の子とすることをもってあらわしたと言うのです。

その内に、キリストの福音があり、神の霊が住まう神の宮であるキリスト者は、神の資産です。

なので、このことを思えば、どんな侮辱も、どんな屈辱も、どんな傷も、どんた痛みも、甘んじて受け入れることが出来ます。
なぜなら、キリストの血による贖いと罪の赦しに較べたら、それらすべて何もかも、ちりあくたに過ぎないからです

心が痛い、傷ついた、物足りない、残念だ、恨めしい、悔しい、名残惜しいという自己正当化の思いはすべて、その内に福音があるという事実を忘れ、伴わず、消してしまっている、または実感が無いという、私たちの罪ゆえです。

Conclusion

私たちが今この場所にいるのは、私たちの能力とか実力ではなく、ただただ神様の恵みであることを確認しなければなりません。

神様が私たちに、「あなたが選びなさい、選択しなさい」と仰って放っておいたならば、私たちは今この場にはいません。

神様が時には無理くりしながらも導いて、恵みと慈しみの道へと入れてくださったために、今私たちはこの場に居て、幸いを実感できます。

私たちは、私たちの信仰が深められれば深められるほど、私たちの歩みを導いておられる方、私たちに良いものをお与えくださる方が本当にいてくださっていることを、どんどんどんどん大きく感じ、覚えるようになっていきます。

私たちが決めたことや私たちの能力が、私たちの人生を左右するのではなく、神の恵みが私たちを左右するということを、もっともっと多く経験するようになります。
だから、私たちに出来ることは、愛し、赦すことだけです。

比類なき罪の赦しゆえに、私たちに出来ることはただひとつ、愛し、赦すことだけです。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ書１：７